

ある本の広告が拒まれました

5月に『鎮魂歌 闇サイト事件・殺人者の手記』(堀慶末著/インパクト出版会)という本が出版されたのですが、朝日新聞の広告審査部が、その広告を掲載できないとしたため、問題になりました。

日本出版者協会(会長 水野久)からは、「本来、言論機関の役割は、重罰化の流れに乗っていたずに報復感情をあおったり、逆に議論を萎縮させたりすることではなく、公共的な言論空間を作りだしていくことにあるはずである。今回の朝日新聞広告部の検閲行為は、そうした役割を自ら葬り去るものである」として抗議文が出されました(6月3日付)。

その後、6月7日になって、朝日新聞社は審査の誤りを認め、広告は改めて掲載されることになりました。

この件に関連して書かれた名古屋の出版社の方の意見を紹介します。(朝日新聞名古屋本社版/2019年5月31日/「本の虫」欄に掲載されました)

異物感に向き合う 劉永昇(風媒社編集長)

名前のない異物感が胸に残る。『鎮魂歌 闇サイト事件・殺人者の手記』(インパクト出版会)を読み終えた感想である。

事件は2007年8月、名古屋で起きた。ウェブサイト「闇の職業安定所」で知り合った三人組が深夜、通りがかりの女性を車に押し込んで拉致し、現金数万円とキャッシュカードを奪っ



て殺害した。その犯行の残忍さと、インターネットを介して見知らぬ者が共謀するという手口が社会に衝撃を与えた。マスコミも大きく報道した事件だから強く記憶している方もいるだろう。犯人グループは全員逮捕され、『鎮魂歌』の著者・堀慶末^{ほりよしとも}被告もまた死刑判決を受ける。その後、控訴審で無期懲役に減刑となるが、二つの余罪の発覚で再び死刑判決を受けた。

『鎮魂歌』は、現在名古屋拘置所に収監されている著者が死刑囚表現展に応募し、特別賞を受賞した作品である。いわゆる「衝撃の事実」のような話があるわけではない。現実と向き合うことを拒み、他者の生命を犠牲にして生きようとした男の身勝手な告解がつつられているばかりである。同時に、どうにもならないほどの人間の弱さにあふれた「作品」でもある。それが私たちを思考停止に陥らせる。その弱さに、どんな感情を向けてよいかわからない。読み終えて抱く異物感とは、そうした惑いなのだ。

6月14日、最高裁で余罪事件の最終弁論が行われる。それを理由にか、新聞が広告掲載に慎重な態度を示していると聞いた。それでは出版を通じて、死刑制度存廃の議論を高めたいという版元の願いを黙殺することになろう。ただの異物の排除に他ならない。



鎮魂歌 堀慶末著
インパクト出版会
定価1800円+税
2019年5月25日刊